資料紹介

小城鍋島文庫蔵『和学知辺草』翻刻稿（上）

小城鍋島文庫研究会
中尾友香梨・白石良夫・三ツ松誠・日高愛子・大久保順子・沼尻利通・中尾健一郎
村上義明・二宮愛理・進藤康子・亀井森・土屋育子・田中圭子・中山成一・脇山真衣

解　題

『和学知辺草』は、佐賀大学附属図書館の小城鍋島文庫に蔵されている近世の写本である。大本、三巻三冊、共紙表紙、仮綴じ。外題は「和学知辺草」（打付け書き）、内題と尾題も同じである。目録はなく、著者の自序を冠する。跋文と蔵書印もない。他に伝本を見ない。

自序末に「寛政五年癸丑孟春　西肥　幽林舎散人題」とあり、下巻末には「寛政五年癸丑季春穀旦　西肥荻城　散人編選」とある。このことから、本書の成立は寛政五年（一七九三）三月頃と推定される。

現在のところ著者は未詳であるが、自序冒頭に「寛政三とせの秋の頃しも、印を解事を得てしかば」[1]とあり、また文中に「已に耳順になん〳〵とす」との記述が見えるので、寛政三年（一七九一）に致仕した元小城藩士で、同五年には六十歳を迎えようとしていたことがわかる。

書名が示すとおり、本書は和学（国学）の入門書である。内容は古代史・古代語・和歌・神道など多岐にわたっており、全般において漢学と比較する形で論を展開している。著者の和漢の知識の量と幅広さは読む者を圧倒させるものがあり、しかもそれが京都や江戸の有名な学者によってではなく、肥前小城の無名の学者によって記されていることに驚きを禁じ得ない。

本書の成立のきっかけを、自序によって簡単にまとめると、著者は致仕した後、肥前の歌枕・松浦へ旅立ち、しばらく伊万里市中に滞在した。旧知に誘われて、山代郷の里村という民間の庵に寄寓し、村里の少年たちに学問を教えた。その折り、少年たちに向学の志があっても、その知辺となるものがないことを顧みて、本書を著したという。

また凡例には、「此書、和学を以題する事は、当時通例の学問は、初学に先づ儒書を学んで、吾国の事に暗く、一生の精力を異邦の道に尽して、遂には吾国を疎んじ、身を終る人有を見て、和学の知辺と成る一助にもやと、千里の謬りを恐るといへども、幼学の一得に備る而已」とあり、本書は和学・漢学ともに一つの新しい時代を迎えようとしていた転換期の象徴性を帯びた作品としてとらえることができよう。

本書が成立した寛政年間は、漢学では徂徠学が急速な衰えを見せ、朱子

学が盛り返した時期である。寛政異学の禁が発令されたのは、同二年つまり本書が成立する三年前である。時あたかも佐賀藩からは古賀精里が新時代の儒学の旗手として登場し、寛政八年には幕府の学問所である昌平黌の教授に抜擢されて、朱子学を振興させる中心人物の一人となった。一方、和学では、賀茂真淵の学風を受け継いだ本居宣長の学問が完成期を迎えていた。そして福岡から青柳種信、熊本から長瀬真幸、長崎からは近藤光輔などが、伊勢松坂を訪れて宣長に学び、新しい古学（国学）を九州の地に将来しはじめた時期である。本書の著者については、師承関係と学統を詳らかにしないが、本書の内容の諸所に、新しい学風の影響を受けた痕跡が見える。

近世の和学入門書としては、はやく真淵に『にひまなび』（明和二年［一七六五］成立）があり、刊行されたのは寛政十二年（一八〇〇）である。また、山岡浚明の遺著『示蒙抄』に増補の手が加わるのは寛政九年、宣長の『うひ山ぶみ』執筆は同十年である。本書『和学知辺草』もこの流れの中に位置づけることができよう。しかも右三書に倍する分量を有し、より広範囲な議論の展開を見せるのは、寛政の初め頃にあっては注目に値する。

むろん本書には今日から見れば明らかに歴史事実に反する記述や牽強付会の説も少なくない。「元（モト）より旅亭に書を携（タヅサ）へざれば、考索（サク）のよすがもなく、記憶（キヲク）の誤り多からん事を恐るのみ」との自序の記述を信ずれば、これらは単に著者個人の記憶違いや思い込みによる可能性も排除はできないが、しかしそれよりむしろ当時の和学者らの普遍的な認識にもとづくものも多いように考えられる。

このようなことを勘案して、小城鍋島文庫研究会[2]では本書の内容の全貌と資料的価値を明らかにすべく、まず上・中・下三巻の翻刻を三回にわたって本誌に掲載し、さらに註釈を施して一冊にまとめて公刊することを目指す。本研究はJSPS科研費JP18K00282の助成を受けたものである。

注

（1）「印を解く」とは「印綬（いんじゅ）を解く」ことを指すと思われる。印綬は古代中国で官吏がその身分や地位を示す印（しるし）として天子から賜った印（いん）及びそれを下げるための組み紐。したがって「印綬を解く」とは官職を離れる意。

（2）https://sagakoten.jimdo.com/

凡例

一　漢字と仮名の遣い分け、送り仮名、仮名遣い等は概ね底本に従った。

一　漢字、仮名は通行の字体を用いることを原則とした。

一　明らかな誤字は正しい文字に訂正した。ただし通用字と判断されるものはこの限りではない。例えば、「朝庭」「各別」「行衛」など。

一　底本の漢字に、濁音符、清音符が施されている場合は、これを残した。

一　通読の便を考え、以下の処理を施した。

1　行移り、丁移りを無視し、適宜、段落を設けた。

2　濁点と句読点を補った。

3　文献名には『　』を、引用文等には必要に応じて「　」を付した。

翻刻

（表紙）和学知辺草　上

和学知辺草　自叙

寛政三とせの秋の頃しも、印を解事を得てしかば、和歌の友を尋ぬとて、遠つ人松浦の方へ志し、しばらく伊万里の市中に徜徉せしに、さいつ頃よりは旧知のいざなひもいなみ難く、山代の郷、里村といへる民間の草の庵に寄寓し、里巷の小児輩を友とし、書を誦ぜしめ、筆を弄ぜしめて、日を消するのよすがとす。

元よりの寒郷、師友の親しむべきもなく、蓬蒿の下に悠然として、菅の根の永き日も海岳をのみ望みて、風帆沙鳥、煙雲竹樹に目を縦にする耳。稲の目の朝戸出には、「雪のふる野」と詠じけん我古郷の天山岳の晴曇を詠めやり、墨染の夕べになれば、浪にたゆたふ月影にめでゝは、顕基の中納言のいひけん配所のさまを思ひ出で、或時は藻塩やく長浜の夕けぶりの風になびくも心細く、世をうみ渡る蜑のいとなきを思ひやり、嵐も寒き牧島の松の色に千とせの齢を延たる心地ぞする。うらさび渡る夜すがらは、寝覚こと問ふ浜千鳥の声に眠りをさまして、閑窓の下に灯し火をかゝげて、橘の蔭ふむ道八ちまたに別れ、古へ今の移りかはれるさまを思ひつゞけて、吾党の小子のもの学ぶに志有るも、多岐に迷ひなむしるべにもやと、そこはかとなくもしほ草書つめぬれば、福草の三巻となりぬ。名付て「和学の知辺草」といふ。

元より旅亭に書を携へざれば、考索のよすがもなく、記憶の誤り多からん事を恐るのみ。しかはいへども、天地の間に万物の霊たる人と生れて、徒らに草莽の中に竄伏して、一生空しく草木とともに朽果なんもほゐならずと、管見の固陋を忘れて、吾が皇御国の貴き事を始め、異国の道のはしゞにも及ぬ。巻中、容易に神聖の道を論ぜしに、謙遜の辞なく、海内の諸君子に対して、辞譲の意薄きが如くなれども、世に諂はざるを以て、樫の実の独り言にし有ば、くれはどり人にあやしめらるの恐れもなし。

されば、経世済民の才とても無れば、世に知られ青雲を攀べき志もなく、徒らに犬馬の齒を重ねて、已に耳順になんとす。身の不肖を顧て、よしなし言とは思へども、たゞにもだし難く、筆に任せて記し侍る。かゝる拙きすさみながらも、もし此言の葉のちり失ずして世に伝はらば、識者の見る目もおもてぶせなれど、宋人の燕石になずらへて深く函底にひめ置んとにしも非れば、蠢爾たる駑鈍の才、いさゝか伏櫪の思ひを馳ざらめやはと云爾。

寛政五年癸丑孟春　　西肥　幽林舎散人題

凡例

一　此書、和学を以題する事は、当時通例の学問は、初学に先づ儒書を学んで、吾国の事に暗く、一生の精力を異邦の道に尽して、遂には吾国を疎んじ、身を終る人有を見て、和学の知辺と成る一助にもやと、千里の謬りを恐るといへども、幼学の一得に備る而已。

一　支那は人国、文学の道有、日本は神国にて、武徳の風土なるを挙て論ずる。是、自己の発明に非ず。皆、先輩に聞る処を筆記する迄也。

一　古へより文武の道を車の両輪に比したるに、吾国の武義に秀でたるを尊称して、文道を卑んずるが如くなるを以、終篇に和漢文学の興廃を挙て、学術の是非を評せず。文道は異国の道たりといへ共、此国に用ひて、人倫の道を正し、政治にも益有限りは、捨まじければ、用捨は其人に有て、学術の罪に非るが故也。

一　兼、不肖、四十年来、粗和漢の書を閲し、先輩の説を得て、心に記憶し置るも多けれ共、老衰の末には忘失せんも本意ならずと、記し留めて、

後昆に伝ふるのみ。しかはいへども、見聞の誤りも多かるべければ、他日博覧の君子に是正を受なば幸甚ならく耳。

一　此編の外に、儒仏の惣論、和漢礼楽の変、金銀銭貨の沿革、章服制度の弁、世間瑣細の雑事等、見聞の及処、古老の口実の耳底に残れるまゝに書記し置べき事、多端也といへども、多病と世紛に妨らるが故に、生涯の内、数月の暇を得て、再び志を遂まく耳。

和学知辺草

一　夫れ、清明らかなるものは、たな引て天となり、重く濁れるものは、つゞひて地と成れるの後、海水大地の四方をめぐらして、人物各其地によつて生成す。其輿地をわかつて六の大世界有が中に、亜細亜州と名付たる世界は、南すまあだら、まろか、呂宋に至り、北は韃靼のおゝびい河を限り、東は日本を極とし、西は欧邏巴州の西紅海に至れり。其内の国数、凡そ大小三百に及べり。

　中にも吾が日本豊蘆原瑞穂国は万国の東頭にして、赤道より北に去事三十度より三十八度に及んで、日月の運行を南方に見、寒熱不偏の界、清陽中正の水土にして、地気豊衍五穀熟し、山より金銀銅鉄を産し、草木繁茂、禽獣魚介に至る迄、豊饒の寿域と称すべし。四面大海にして土地隣国に接せざれば、古より防禦の憂もなし。西の方、海を隔て朝鮮、琉球、唐土、天竺有り。西北に韃靼、女直有り。

　西南方の諸蛮は、元亀天正の頃ほひより商舶を通じて交易せしかど、其国に尊奉する天主教の術を民間に施し広め、世を惑はし民に害有を以、国家厳に制禁ありて、寛永の末つかたより、西南蛮の三十余国の互市、一切に是を止む。唯紅毛と唐人の長崎の港にて纔に交易を許し給ふのみ也。

　又、日本より東方は、二万五千里の間、海上漫々として国なし。されば、日本は東方の極界にして、太陽日輪の一昼夜左旋一周して、重溟の游気に浴し、一洗新たなるが如く日光始て照すの地なるが故に、日域或は日東と号する事も、西の唐土より名付たる也。又、日本と称し始めたる事も『東国通鑑』に始て見ゆ。吾朝は天智天皇の御宇に当れる也。朝鮮の号も、同じく彼土より望めば、朝日の海水に浴して鮮なるに取れる名なるもの也。西の方、印度の地を西域、月氏など名付たるも、唐土より称したる名成べし。

一　日本国は、東方陽気発生の地にして、太陽日輪の精降つて日神御出生の国なるが故に、殊に尊日事、匈奴の月を尊ぶが如し。故に、日の少宮、日向国、槌日岳、天津日嗣、日御蔭、日御綱、天日蘿、日御座、日御剣等の称有り。上古、「彦」の字を以、皇孫の御名に蒙らしむる、皆日子の謂也。九州の彦山も、吾勝尊を祭れるが故に、日神の御子なる事を明して、古代は「日子の山」と称す。又、「人」を「ヒト」、「一」を「ヒトツ」と唱ふるに、訓伝有事也。又、『易』に曰、「帝出二於震一、震東方也」と。

　然ば則、吾が国常立尊は、独り吾国の帝祖のみならんや。宇宙万国の常尊なり。天地の開闢と一致に御出生有。則、真の天子也。此故に姓氏なし。神流にして人類に非ず。古より今に至るまで、唯一帝系也。異姓の替つて継者なし。固より簒奪革命の事なし。『万葉集』に、天子を「惟神」とよめり。又、『公式令』に、蕃国の使に宣詔書に曰、「明神御宇日本天皇詔旨」と云云。

　又、震木発生の陽気をうけたる風土なるが故に、自然に勇武の道を好

んで、仁愛の情を兼備ふ。常に清浄潔白の事を好み、陰濁汚穢の類を悪めり。殊に、喪穢産穢を忌て、火の穢を第一に慎めるは、日徳を尊ぶ神国なるが故也。仁徳帝の曰、「吾国神国也。漢土は人国也」と。推古帝の曰、「神国何入二人国之道一」云云。又、土風貴二質朴一ものは、上古神代の遺風也。

又、吉礼に厚ふして、凶礼に薄し。此故に、年始、婚姻、誕生、元服の嘉儀等は、民間の人といへども、嘉肴美酒を備へて、其祝物、皆亀鶴の千代万代を象れり。年始は陽気発生のはじめ、婚姻は人倫相生の根本なるが故也。喪事は、上古、大己貴尊の三諸山の伝に准じ、至て朴素を旨として、異国の喪制の詳なるが如くならず。皆是、陽を尊び、陰を賤しむの故也。

又、勇武を貴ぶといへ共、兵器の類、殺伐を司る凶器たれば、皆寸尺に奇数の陽を用ゆ。たとへば、弓の長七尺五寸、刀も三尺三寸、或は弐尺七寸、短刀は九寸五部抔、皆陽数を用るは、武家の故実とする処也。

唐土を辰旦と号するは、星辰の応ずる処の国なるが故也。殊、北辰を尊んで皇極といひ、又、天皇太帝、或は紫微垣、帝座と称す。後漢の光武帝の故人、厳子陵が、足を帝の腹上に置たりしかば、天象に顕れて、客星帝座を犯すと、司天の官人驚き奏したるの類也。

唐土の地は、西北高く、東南に大海を受たり。『易』に曰、「離明也。万物皆相見。南方之卦也」と。故に国を華夏と号す。古の聖王、是に則て、皆江北に都し、南面して天下を治む。聖人出生の人国也。天子自ら称して、「予一人」と云り。

又、印度を月氏国と云は、太陰月輪の応ずる処の地にして、大地中水脈の源也、阿耨達池有。唐土第一の黄河も、河源を尋れば、是より流れ出るといへり。大国なるが故に、南方は大熱にして、北地は大寒の国也。

中天竺浄梵王の太子に、薄伽梵氏出生して、仏教を広む。陰気盛なる国なれば、人皆邪智執着の念深きが故に、今日人倫の教を施しても、濫悪偏執の俗を化度する事難きを以、其説の広大無辺なる、先づ三千大千世界を建立し、三世因果の道理を示し、一切衆生の生死の海に流転する有さまを説。今日娑婆にてなせし悪逆の業因に引れて、三悪道に堕在し、未来永劫の苦患免れ難しといひ、或は今生にて慈悲善根の功徳によつて、来世は紫磨黄金の仏体を得て、安養浄土に往生し、無比の怯楽を受しむべしと進め、地獄といひ極楽と云も、皆是、世尊方便の説より起るもの也。或は生老病死の人界なれば、盛者必衰の理りをもるゝ者なく、すべて今生は夢の中ぞとさとらしめ、諸行の無常を観じて、寂滅為楽の法を最上とす。太陰の水を象どり、国王灌頂を貴び、釈教月輪観を修せり。

一　和漢帝系の優劣を粗挙て評せば、吾大御国は開闢の始、国常立尊、天地と共に御出生ましゝてより、神代七世を経て、天照大御神の御代しろし召に及んで、時の摂関たりし高皇産霊尊、神皇産霊尊の八百万神達とはかり給ひて、皇孫、天津彦火瓊々杵尊を豊蘆原の中国に降し、世を治めしめんと、三十二神、各供奉し奉りて、猿田彦神の導きに任せ、日向の国高千穂の岳に降臨有り。

国を治め、鎮め給ひしの後、数世を経て神倭磐余彦の尊の時、東征を思し立給ひ、帰順ぬ荒振神等を平げ給ひ、大和国橿原の宮に御即位ましゝてより、神胤、今に聯綿として、百二十代、年暦二千四百五十余年の久しきを経て、天位の動きなきは、神国の外国より秀でたるのいちじるしき也。

漢土の帝流を考るに、三皇五帝の後、夏殷周の三代を経て秦漢に及び、武帝の匈奴を征するより、禍乱の端をひらき、三国晋の時に五胡の夏を擾るの余り、遂に南北朝の乱を生ず。隋唐五代を経、趙宋の代に至り、遼金の禍有。此後、蒙古に天下を奪はる。是を胡元と称す。衽を中原に左にする事九十年也しを、明の太祖出るに及んで、中華を復するといへども、明末の衰弊に乗じて、遂に奴児干の北狄、代つて帝と成る。

大凡そ堯舜より清朝に至り、年歴已に四千年、帝王姓系を異にする事二十四度。表は受禅の名を以すといへども、多は是、人の天下を奪へる也。漢土は聖人出生の国にして、礼楽仁義の教、人倫の道を専らにすといへども、秦漢已後に及んでは、其道、儒者の業と成て、其術域中に行れず。継レ天立レ極の天子も、終には夷狄に天下を奪はれけるは、人国なるが故なるもの也。日本は開国已来神胤歴々として、天壌無窮の真の天子成と、年を同ふして語るべからず。

一　日本は武国にて、唐土は文国也。其証を挙ていはば、吾大御国の上世、天照大御神の弓矢を携へ剣を帯し武備をなして、素盞烏尊の慕悪を待し給ひ、又、経津主神、武甕槌神の威武を厳にして、建御名方神を攻退け、大己貴神を和め給ひ、或は素尊の八岐大蛇を退治し給へる、是、神軍伝の起る処也。其後、神武天皇の東征に及て、兄猾弟猾を伐、長髄彦を征し給へる時は、日の御蔭を背負給ひ、仇を平給ひしこそ、後世、賀茂の葵祭の始、軍家者流に秘し伝ふる大星の起本也けらし。

如此、威武を輝して天下を平定し、蒼生を安んじ給へども、異国の如く文徳を脩めて四夷を来服せしむるの術は、吾国の古へには無き事也。後世より神武と尊号を奉りけるも、武徳を尊称して諡し奉るもの成べし。

其後、仲哀帝慕崩じ給ふにより、其后息長足姫、国津神の教に従ひ、新羅を征し給へば、彼国速に神国の威武に服して、毎年八十双の貢船を奉りしとかや。或は日本武尊の熊襲を退治し、東夷を平げ給ふの事、旧記に詳也。此尊の御名も、川上のたけるが名付奉りしと也。

夫より後、推古天皇の朝より、世々の帝王大臣も仏乗に帰依まし〳〵て、神祖の道に背き給ふにより、天位次第に衰へ行、文武天皇已来の律令格式も行はれず、威武を四海に輝し給ふ事あたはずして、朱雀帝に至り承平天慶の乱を生じ、奥州の夷賊蜂起して、前九年、後三年の戦有り。遂には保元、平治の大乱に及の後、平の清盛入道権を専にし、平氏の一門、官位ほしゐまゝに昇進し、西三十七か国を領し、六波羅の全盛時を得て、累葉一門の繁栄肩をならぶる人なし。

人臣の極官たる太政大臣に経上り、己が女を中宮に備へ、一天の君を聟に取、驕奢淫佚を縦にし、第宅の構へ、今の大仏殿の地を中央にし、北は五条、南は七条を限り、境地広大にして、殿舎には珠玉を鏤め、楼閣に香木を聚て、凡一百七十余宇に及べり。重盛の居宅、小松殿迄弐拾余町の間、殿宇建続て、華麗目を驚せりとかや。其外、譜代家臣の屋宅、五千弐百余宇有しと也。

其後、源の頼朝卿、伊豆に起り、木曾義仲、信州より旗をひるがへし、平家西海の浪に漂ひしより、頼朝卿天下の兵権を擅にするに至り、後白河法皇より日本国の惣追捕使を賜ふ。是より諸国に守護を置き、代官、目代、或は地頭、御家人と云者、国々に威を振ひ、公家より任ぜられし国司は有か無かに衰へける。此頃よりぞ、公家、武家と云詞は始りける。

垂加先生の説に「素盞烏尊治二天下一権帰二武家一、始二平清盛一成二源頼

朝」と云云。是、吾神国の武徳、一変して下に遷れる始也。夫より後、北条氏天下の権を執るに及んで、三帝を遠島に遷し奉り、仮りに将軍をすへ置、己れ天下を押領する事、已に九代にして相模入道宗鑑に至り、驕奢を専にして、程なく権威を失ひ、鎌倉に滅てより、元弘建武の大乱に及び、天下麻のごとく乱れて、戦争やむ時なく、偏に猛獣の肉を争ふに異ならずして、万民手足を措に処なし。

漸々室町家起るといへども、兵威四海に加ふる事あたはず。南朝を廃してより政道に怠り、奢侈生じ、一家の心はなれ、家臣の争ひ起り、応仁文明の戦ひに帝都を騒がし、遂に鹿を失ふに及んで、織田氏、豊臣氏相継で起り、大業の志は有ても、唯智勇を専にして、仁恵の徳闕たる故にや、天下創業の功を全ふする事あたはず。

御当家、徳川の神君、聡明神武の御質にて、智仁勇御兼備まし〳〵、四海を平定し給ふに及んで、源平已来、五百年来の干戈始て治り、賢君良臣相継で出給ひ、武備を全ふし、安民の御政事怠り給はず。万の廃たるを興し、千の絶たるを継しめ給へば、諸侯賓服し、士民堵を安んずる事を得たる、ほとんど弐百年に及べり。

古より御治世の盛んなる事を喩ふるには、延喜天暦の御代と称すれ共、今の御静謐には不及と見えたり。其頃、撰集の歌の序などには「聖の御代」と書て、其時の天子を祝ひ奉りたるもの也。其詞によりて、後世の人は何の詮議もなく、醍醐村上の御時は聖人の御代の様に思へり。和歌の序の誤りにてはなくして、後人の本朝の学問に疎き故也。

其証、一、二を挙て論ぜば、延喜帝、讒を信じ給ひ、無罪菅原道真公を太宰府に左遷し給へる、人皆知れる処也。

又、紀貫之『土佐日記』を閲するに、貫之、延長八年に土佐の国主に任ぜられ、承平五年に任限満て帰京有。土佐の国府より船出して、和泉の国迄の舟中の事を記せるに、正月廿一日の所に「浪と海賊の恐ろしければ、七十八十年の老の一時に吾身に来たる心地して、頭もみな白く成れる」と記し、同廿三日の所に「此渡り海賊の恐れ有といへば、神仏を祈る」とも有。同廿五日「北風あしといへば、舟出さず。海賊追来といふ事たえず」、同廿六日「海賊追ふといへば、夜半ばかり舟を出して、道にたむけし、ぬさ奉る」、卅日「雨風ふかず、海賊はよるありきせざん也と聞て、夜なかばかりに舟を出して、阿波のみとをわたる」と云々。如斯、所々に海賊の難有ん事を国の守たる人の恐れしは、いかにぞや。

すべて其頃は、仏法一種に打傾きて、世の中おだやかならず、王政は日々に衰へ行、盛なるものは藤氏の威勢争ひと、三井、山門、興福寺のいさかひ也。又、将門、純友、武衡、貞任が謀叛相続ひて起れり。其御時代をさして、いかでか聖代と称せんや。

是を以考れば、御当代の泰平、日本国中の繁栄は、延喜天暦の御代に超たる事、百倍共申べし。是、偏に東照神君の御武徳にして、吾国上世の威風、再び世に明なるもの也。神君、御代をしろしめす始に、いさゝか声色の御好みおはしまさず、御身の栄耀を事とし給はず、物毎質朴をもとゝして、華美を戒め、天下の為に財を惜み給ふ事は、漢の文景にも越給ふべし。

其後、太平久しく相続ひて、剣は箱に納り、弓を袋にするの御代なれば、兆民陶々の化に浴して、驕奢淫佚の風盛んに行はるに従ひ、富商大賈時勢に乗じて、貨利の権を擅にし、諸物高価になるに付て、世上困窮に及ぶは、上下皆己が分限を忘れて、奢を専とせしに起るもの也。

され共、当時は、たとひ飢饉の凶年に逢ひ、凍餒の民有とも、府庫の

財を発して、各菜色の憂を免れしめ給ひ、御仁徳、四海に遍く、津々浦々に至るまで、落たるを拾はぬ御代なれば、天下の諸侯、各其境内を守り治めて、旅客の往来に盗賊狼藉の煩なからしむ。此時に於て、国の守たらん人の朝覲の礼として、参府交替の道中に、海賊の恐れ有とて、片時も滞り給ふ事有んや。まして公儀の御用とだにいはゞ、はし〳〵の足軽小者の通路たりとも、山海の両賊強窃の党類は、身を縮めて山林に逃隠るべし。実に野の末、山の奥までも御威光の及ばざる所なく、御恩沢を蒙らざる者もなくして、万民安楽に、万物各其所を得たる御政は、古へ延喜天暦の御治世には超たりとや申べし。

扨、古へは異朝にならひて天下郡県の治にして、農兵一也しが、当御代に及んで、列国に諸侯を封じ給ひ、自然と堯舜三代の古への如く、封建の形と成により、農と兵とは各段にわかれ、今更武士と百姓は別種の様に成りしは、古今の一変成べし。尤、異朝三代の古は、兵を農に寓といへり。郡県と成て、唐宋の制は農と兵を分つと見えたり。又、本朝も古へ軍団の制有て、農兵の分ち有りし世も有ば、一概には論べからず。和漢の制度同じからねば也。

又、唐土を文国といふ事は、書契有てより以来、代々の聖人相継て五礼六楽を制し、天文暦数を明らかにし、服色制度の詳なる、五倫を正し五刑を慎しむの類、二帝三王の治、載て六経に備れり。

周の衰ふる頃ほひ、大聖孔子出たりといへ共、下位に在て、政教を天下に施す事を得ず、先王の道を集めて大成し、是を門人に伝へ残して、後世に教を垂る。孔子の語にも、「文不レ在レ此乎」「郁々乎文哉」「文吾猶レ人」といへり。又、顔回も「博レ我以レ文」といひ、子貢も「夫子之文章」といへり。是、孔子を以、末代、文学の祖と仰ぐゆゑん也。其後に諸子百家九流の学、詩賦文章の盛んなる事、代替り時移りても文学の道の衰ふる事無は、文を崇ぶの国成るが故成べし。

一　日本国は言葉の国にして、唐国は文字の国、天竺は音韻の国といふべし。先、吾国の上世は人の心直くして、なす業も少なく、詞もしたがひて少なし。詞少なければ、惑ふ事なく忘るゝ時なし。其詞と云は、天地を父母として神人のおのづからいひ出し給ひけんに、アイウエオ等の五十の音、自ら備はれり。

のべていへる有、つゞめていへる有。二言を約めて一言とし云は、たとへば「和布」を約めて「にぎて」と云が如し。或は長き詞を二重三重につゞめていふ有。「かるがゆゑ」を「かれ」といひ、「寒くもあり」を「寒み」といふの類也。又「老る」をのべて「老らく」といひ、「うつる」をのべて「うつろふ」といふの類也。又、略言有。「過いにし」を「過にし」、「小青」を「さを」といふの類也。又、彼是を通はしていへる有。「あたご」と「おたぎ」、「おのゝく」と「いなゝく」の類也。

惣じて上つ代は物ごと質素にして、事の少なきまゝに詞も少なかりしが、世を経て質より文に移て、事も繁く成行にしたがひ、詞も多く成り来りしと見えたり。古へは「善」を「よ」とのみいひしを、事にしたがひて、「よき」共、「よし」共、「よろし」共、「よか」共、「よからず」共いへるは、「よ」の一言を母として、うみ出せる詞也。

又、いふ声に緩急有、長短有、発語有、助語有、二合三合して詞をなす有。或は言便に従ひ、軽重清濁も自ら備れり。又、一語に多義を含む有。「文」は「古きを見る」の義、「ふくむ」の義、「踏」の古事有の類也。是、和語の妙と云べし。

すべて上代は詞をもていひ伝へ語り継げるに、唐国の文字伝はりてよ

り、是に託して人の記憶も薄く成りしもの也。

又古へ、素盞烏尊、天の八十河原にて千鳥の足跡を見給ひ、是になぞらへ、初て文字を作り給へるといへるは、神道家の説にて、唐土の蒼頡が故事にならゑる近世の浮説成べし。

又、卜部兼倶の説に、「神代の文字一万五千三百五十余字有。声明のはかせを付たる如き字共にて、是、亀卜より起る」と也。亀を焦す時に、変じて一万余となる。其拆やうが文字の体となる。吉田家の秘事にして伝たる由いへど、兼倶は偽り多き人なれば、信じ難き事也。

太の安丸の『古事記』、舎人親王の『日本書紀』をしるし給へるは、上代より家々にかたり伝へたるまゝに、漢字をかりて和字の旁に注せしもの成べし。『中臣祓』も、始めは和字にて記せしと也。聖徳太子、聡明の英質ましく〳〵て、高麗の恵慈に梵経を習ひ、百済の覚恕に紀伝を学んで、和漢に通じ、梵文に対訳せる如く、和字の傍に漢字を附し、『論語』の如き書には、左の方に音を付、右の傍に和語を附給ひて後、吾国の人、始て和語を以、彼国の書を読事を得たりとかや。

其後、天児屋命十八世の孫、常磐大連に至り、『中臣祓』の本文を改て漢字に記し、旁に和字にて和語を附しと也。尤、此以前、応神天皇の時、百済国より始て『論語』『千字文』を渡せしかども、吾国の人よむ事あたはざるが故に、博士を彼国に求給ふに、王仁と云人、来朝して宇治の稚郎子に師とし、書を読事を教奉りしも、定て百済の読法にて有べければ、其書の意に通ずるには及ばざりけんと覚ゆ。されども、王仁は久しく此国に住して、和国の詞によく通ぜしと見えて、仁徳天皇の難波の宮に御即位ましく〳〵けるを賀し奉りて、難波津の和歌を詠ぜしをもて、推て知べし。是を以考れば、此国に漢音と称するは、王仁より伝へし音成べし。

惣じて、吾国の異国に通ぜし始めを思へば、素盞烏尊の韓国に至り給ひて、木の種共を持帰り植給へると云事、『神代の巻』に見えたり。其後は、日本圖草を贈るといふ事、周の成王の時なる由、彼国の書に見えたり。是、吾国にては、鵜鶏草不葺合尊の御宇に当れり。其後は神功応神已来、年々に貢船を献るにしたがひ、おのづから彼国の詞も混ぜしと見ゆ。

夫よりして、仏教の渡るに及んで、君臣共に是を尊崇あり。仏氏の道盛んに行るゝにしたがひ、求法の為に入唐の僧も多く、又遣唐使をも命ぜらる。此後は和漢よく相通じて、梵漢の語流布するに至れり。鎌倉の北条家、禅法に帰依有て、蘭渓禅師来朝の以後、禅語も多くはびこりぬ。「行灯」「行脚」、或は「下堂の鐘」の類、宋音も交れる也。

今、日本の詞の美悪を論ぜんに、京都の詞にしくはなし。京詞は、「花」「鼻」、「雨」「飴」、「橋」「端」「背」の類をよくいひ分けて、平上去の三声、自ら備はれり。され共、先輩の説に、「奈良七代の都の詞は正しかりけんを、今の京となりて、近世、尾張談交れり」と也。信長より秀吉迄二代の後の事成べし。然ば、足利将軍時代は、関東詞も雑りたる成べし。京訛りと云は是也。

又、京都将軍家の世には、物の異名を唱ふる事、雅なる事の様に覚えたる風俗也しは、五山の僧衆など、御はなしの相手に出られし時、饅頭を「十字」といひ、茶碗の下品なるを「ごす手」など云の類、当座の滑稽にて、室町殿時分の常談也。

又、諸国の言葉、思ひ〳〵にかはり有。中人以上は、多くは江戸に会し、京都、大坂に出て、人に交らふ事も多き故に、文字にも通じ、其い

ふ詞、さまでかはり有とも見えねど、中人以下、文字にも疎き辺鄙の土人の詞は、何とも聞わけ難き事のみ多し。

其内には、古代の詞、残り伝はりたるも有也。其証は、此間より松浦閑居の内に、山代郷の小児共の、蟹を「がね」といふを聞て、「かに」とこそいふべきにと、始めはおかしく覚えしが、『日本書紀』衣通姫の御歌に「吾背子が来べき宵なりさゝがねの」と有を思ひ当りて、「がね」は古代の詞なるを知りぬ。かゝる田舎の詞は、却て昔のまゝにて残れるも有也。又、人多き城下などは、時々にいひはやらす詞も有て、さま〳〵に転じて、古の詞は失ひ行と聞ゆ。

さて、今にも古代の詞を考んとならば、『古事記』『日本書紀』『万葉集』に記せる詞を見て、古言を求るの外なし。上世の歌詞は、其時の詞をもて、昔人の心の直きまゝによみ出せるものなれば、其世、其時の詞なる事いちじるし。

後世、儒仏の教はびこりて、世の中、事繁く成来るに付ては、詞も品々にわかれ、多く成り、外国の詞も混雑しぬ。就中、百済の語、多く吾国の詞に雑れり。海を「わたつみ」、虎を「とら」と云類也。

近代、南蛮人の往来せし時より蛮語有。「たばこ」「きせる」「らう」「かぼちや」「もうる」「さんとめ」「ゐんでや」の類也。西土の仏教弘まりしより、梵語多く流布せり。猿を「ましら」、杜鵑を「ほとゝぎす」、南風を「はゑ」、殕を「かび」、杖を「つゑ」、痴を「ばか」、判決を「さばく」、瞟眼を「ひがめ」、窃盗を「すり」、花蛤を「あさり」と云の類也。又、和蘭人の語も有。鎖紐を「ぼたん」、雨衣を「かつぱ」、肌着を「ぢばん」、灯架を「かんてら」、毛布を「とろめん」、琉璃を「びいどろ」と呼ぶの類也。

惣じて、順の『和名抄』をはじめ、和語を解たる書少からず。仙覚律師の『万葉抄』を祖とし、難波の沙門契沖の『代匠記』、貝原翁の『日本釈名』、白石先生の『東雅』に至るまで、未だ解尽せりとも見えず。復古の学に志有ん人は、思ひを加ふべき事ならずや。

唐土を文字の国といふ事は、伏羲氏、河図に則て八卦を画し、蒼頡、鳥跡を見て字を制し、結縄の政にかへしより、文字を以、支干を記し、天文暦法医卜の法有のみならず、二典三謨を始め、代々の治乱興亡の跡、史官の記する処照々として、数千歳の後より見ても、其文字をだによみ得て通じぬれば、掌を指すよりも安きは、偏に文字の徳といふべし。彼土も、質より文にうつり、次第に事繁く成行にしたがひ、経伝、歴史、諸子百家、詩文小説にいたる迄、汗牛充棟の書、皆文字を以記するによれるもの也。

扨、字体も古今に変有。上世、科斗の文字、篆隷の制、日用に便ならざるを以、漢の王次仲、楷書を作れる。晋の諸名家の草書、専ら世に行はれて、今に廃せず。

又、字には音と義と有。一字多音にして、多義を含る有也。古へは韻学委しからざりしと見えて、秦漢已前、仮借の声多く、音に平仄なし。皆、通用せり。『毛詩』三百篇、『楚辞』の類韻を大概に押して、皆叶韻也。斉梁の時に及んで、西竺の仏学盛んに行はるゝにしたがひ、悉曇の法により反切し、帰字を求る韻学起り、梁の沈約、天下の文字を平、上、去、入に分つてより已来、四声七音悉く備はり、漸々に文字の製も数多くなれるもの也。

此時分より後に、韻書共多く出来る。隋の陸法言が『広韻』、是、韻書の始也。唐の代に司馬孫愃が『唐韻』あり。宋の代に丘雍が『礼部韻』

あり。宋の季に『古今韻会』あり。元の代に孫吾与が『韻会定正』あり。明の代に至り『洪武正韻』有。和国の『三重韻』は、『古今韻会』の一百七韻の文字を十二門にとり直したるものにて、虎関禅師の作也。

字書は『説文』をはじめ、其後、『玉篇』出来、梅誕生が『字彙』にも三万三千の字を納めたり。『康熙字典』の注解、又詳也。『正字通』は正字、俗字、誤字等を出す。右の外にも『韻府』等の字書多く出て、文字の意義いよ〳〵精微を尽せり。

字々其意義を含めるを以、字を積んで句をなし、句を積んで章をなし、篇をなす。其書により其巻を開けば、天地の間、古今の人物人情世変に至る迄、詳に尽さずと云事なし。先づ聖賢の経伝に対しては、其門に遊んで、直に其教を受るが如く、二帝三王の天下を安んずるの道、人倫の法則を知べし。

歴史を繙ては、今の世に生れて、数千年来の事跡を掌中に見るが如く、其代に遊び其事に触たる心地して、天下国家の治乱興亡も、鏡に写る影の如く也。

明君の賢臣を用て国家を興せるは、姦邪を遠ざけ忠言を容れ、其身も千辛万苦して、生民の塗炭を救ふに心肝を砕き、昼夜寝食を安んぜず、漸く天下創業の功を成就して、君臣共に子孫皆、其徳沢を蒙らざるは無きの後、数世を経ては、必ず暗君出て、祖先の勲労を忘失し、栄華の余り昼夜佚遊に耽り、酒色に長じ、無益の楽しみに金玉を費し、厩には肥馬千駟を繋ども、野外に餓死人有を顧みず。此時に乗じて、佞奸邪智の輩、勢ひを得て朝庭に威を振ひ、驕奢を専にするが故に、日用足らず、下に課役を懸て、諸民を苦む。たま〳〵忠貞の臣有て、諫疏を奉るといへども、忠言耳に逆ふて、取上げ用る事なく、或は誅せられ、或は四夷に退らる。忠臣義士の用ひられざるを見て、賢才の人は皆、山林田野に隠れて、権勢に阿り傲吏に交る事を恥とす。

すべて亡国の前表は、皆佚楽に耽り、忠言を拒より起れり。甚ふしては、隋帝の如き、数石の蛍を集めて山谷に放ち、或は五百の宮女をして清夜遊の楽を奏して遊行し、数百里の柳堤に飾舟を引しめ、八万の役夫、皆足に蛆蛆を生ずるに至る。又、趙宋の滅る前には、佚興の余り、廿五の菩薩来迎の真似などをせし。阿房の類、史官の記し置る跡照々として、今に千載の昔を見るが如く也。

又、詩賦を誦じては、土地山川の風色、恍として目前に現じ、飛閣金殿の壮観、珍禽奇獣庭に遊び、或は五雲の珠樹に映ずる仙境を想像し、見ぬ唐土の海岳に遊歴したる心地をなし、或は遷客騒人の世を憂へ、時を悲しむの情を感じては、其楼に登り、其人に対するが如き思ひをなすは、実に飛耳長目の術成べし。是、偏に字をつらねたるの内に、其意義を含めるが致す処也。げにや、魏の文帝の「文章は経国之大業、不朽之盛事」といへる、宜なるかな。されども、其文字をくさるに、各体裁有て、字法、句法、篇法、発語、助辞有り。

又、和漢、体用の差別有。唐土は用を先にいふて、体を後にせり。譬へば、彼国にて「看花飲酒」といふを、日本にては「花を見、酒を飲む」といへる類也。此故に、唐土の文を日本にてよむには、五字三字一行をも隔てよむは、理りを先にいふて、事を後に顕したるが故也。日本と天竺は体を先にいひて、用を後にいへり。此故に、仏経を漢字に翻訳するに、漢文の如く訳せる中に、天竺のまゝにて直に訳せる処も有也。「如是我聞」の如きは、倒語のまゝにて、漢土の文章にはわざと訳せざるのよし也。太宰氏の説に、「日本の語は倒なるが故に、漢文をよむに、顚倒

の読をなす」といへるは、元来、和漢体用の差別有事を、いかに心得られけん、覚束なし。

抑、天地の間に人世に益多事、文字より外に貴き宝は有まじきものなり。李漢も「文は貫道之器也」といへり。蘇東坡の「人生れて字を知るは、憂患の始め」といへるは、憤る事有て発せるか、仏老の見にていへる歟。禅家の不立文字といふは、教外別伝の事成べし。

天竺は音韻の国といふ事は、一切の音声は五十音より生ずる也。五十音とは、アイウエヲより後のワヰウエオに至る十種の五音有をいふ。『涅槃経』の文字品に十四音を説り。五十字をたゝんで、十四字としたる也。十四音とは、アイウエヲを五とし、カサタナ等を九とし、此十四音、合すれば三十六音を生ず。是、五十音也。九字を父とし、五字を母として、三十六字の子を生ず。又、『悉曇字記』の四十七字も、皆十四字をもととす。

梵天所生の四十七言の中に、十二字を摩多と云。開すれば十二字なれ共、合すれば、アイウエヲの五字也。三十五字を体文と云。是も合すればカサ等の九字に摂す。阿州延命寺の浄厳阿闍梨の説に委し。『西域記』に云、「詳二其文字一、梵天所レ製原始垂二則四十七字一。遇レ物合成随レ事転用」。又云、「中印度物為二詳正一辞調二和雅一。与レ天同音気韻清亮」云云。然れば、天竺は此四十七字を源として、二合、三合、四合、五合して、千万の字を生ずる也。釈迦の五千余巻の経文も、是を以書るもの也。

契沖の説に云、「本朝は大唐の文字をかり用ふるといへども、音韻はかへつて天竺によく通ず。其故は、梵文をよむに本朝よくかなふが故也。本朝は呉、漢の二音有。呉音は南天竺に近く、漢音は中天竺の音に近し。唐土は北狄に国を奪れて後、今の華音正しからず。梵文をよむにかなはず。然ば、本朝は詞の正しきのみにあらず、唐より伝はれる音も正しき也」と云云。契沖の説、如斯といへ共、予窃に按ずるに、音韻の精微を尽せるは、天竺を最上とす。華音、是につぐ。日本の呉漢音も最初は正しかりけんを、世々を経て転じ、今更和音と成来れば、大に劣れりといふべし。日本は、是、言葉をむねとする国なるが故也。

又、印度の人の梵音を唱ふるの妙なる事は、昔普照国師に従遊せる無心禅師の説に曰く、「偶山寺に遊び、忽ち聞に、其音鏗鏘として、鐘磬のごとく瑲々として、雑佩の如く、笙を吹がごとく、又鸞鳥の相和鳴するがごとく、漸く聞ば、人の歌謡するものゝ如し。是を聞ては、秦楼の上に羽化するか、兜率天に夢遊するかと、感にたえざりしに、しばらく有て傍の僧に問へば、此僧、殿を指していへらく、梵僧の『金剛般若経』を誦する也」と云云。是を以按ずるに、読誦尚然り。彼の梵唄讃誦の奇なる、言舌の比すべきなかるべし。彼の梵音を用る時は、天地を感動し、炎天に雨を降すの奇瑞も、などか無るべき。然るに、梵音を華音にうつす時、梵字の傍に漢字を書して対訳せる多羅尼等を、和音にて唱ふる時には、音韻大に変じて、天竺の人は一句解せざるべしと思はる。

近世、白石先生の説に曰、「吾が東邦は、其尚ぶ所、言詞に有て、声音の響きすくなし。支那は其尚ぶ所、文字に有り。音韻の如きは、其学西竺に及ばず。是を譬ふるに、鶯の鳴声を聞如し。吾国の詞は、初音の渋りて響き無き也。支那の語は、春半の頃、其声やゝ滑にして、谷を出、喬木に遷る鶯のごとし。西竺は、春も暮ぬべき頃、百千の囀り有。流鶯といふ、是也」と云云。又、仏学者の説に、「南閻浮提の異音、七百二十種有」といへり。其説、広しといふべし。

一　和字の大略を挙ていはゞ、神代の文字の沙汰は前に論ずるがごとし。唐土の文字渡り来し後は、古人多くは草書を学べると見えたり。又、和字を制作有しは、人皇四十代天武天皇の頃、境部連石積等に命じて、『和字』四十四巻を造らしむといへり。され共、漢字の宜に不及と見えて、長く世に行はれず。今、俗間に少々和字の残れる有。「畠」「辻」「榊」「鑓」等の字の如き、是也。

『万葉集』も古代は草字に記しけんを、後に楷書に改る時、草の字を見損じ、書誤りたる多し。「山」の草字を「弓」と見て、「高山」を「高弓」と書、「田上」を「白月」とよんで「白月」と写し誤れるの類多し。

異朝にも相似たる事有。上古の経書など、竹策に科斗の文字をゑり付有しを、後世の字を以写すに、見誤りたる事も有と見えたり。『論語』の「宰予昼寢」を、徂徠先生の説には「昼レ寢なるべし」といへるの類、是也。

又、漢字を借りて和の物を記するに、「つばき」に「椿」、「かも」に「鴨」、「う」に「鵜」の字を用ひしは、当らずといへ共、詞にそむかざれば、かゝはらぬ事也。但し、右の訓を用ひて漢土の書を解せば、大に誤る事有るべし。

『万葉集』も、天暦の御時に源順に命じて和点を加ふ。是を古点と云。其後、法成寺関白道長公、藤原良経をして、楷字の旁にかんなの歌を別にかゝしめ給ふ。其外に、大江匡房、藤原基俊、各点を加へらる。是を次点と云。其後、仙覚律師、点を加ふるを、新点と云也。

古へ『万葉』の歌を記するには、字音を仮て真名がなに書る有。字義をかりて書るも有。通正字、別正字、全仮字、半仮字、全義読、半義読等の七種有事也。

其後、四十四代元正天皇の御時、吉備大臣、神言音韻を感得し、漢字の偏旁を取て片カナ五十字を製作有。是を大和がなとも云。奈良の都にて造れるが故也。此事、京都下御霊の社伝に出たる由。吉備公は御霊八所の内に合せ祭るが故也。

其後、五十二代嵯峨天皇の御時に、空海、『涅槃経』の四句の文を和らげ、「諸行無常」等の句の意を翻訳して、「色は匂へどちりぬるを」と云四十七字を八句に作れり。此いろはもじは、草書の字体を至極に和らげたるもの也。空海は密宗にして、悉曇学に委しきが故に、梵文の四十七字、自ら吾国の五十音に相通じて、もるゝ語なきを覚りて作れるもの成べし。梵文は四十七字より一切の字を生じ、いろはは四十七字より千万の語をしるすに、もるゝ事なし。梵文は二合、三合して一字を生じ、和語は二言、三言をかさねて、漢の一字に訓点する也。阿蘭陀の如きは、文字二十四有を、二字合せて四十八字となし、其語を尽すに足れりと也。

又、『日本書紀』の歌などは、漢字の音ばかりを仮りて記し給へり。古へ吾国神製の五十音の内に、「を」「お」、「え」「ゑ」、「い」「ゐ」の音、明らかに異也しなり。かく有らでは、此国の言をなさゞるが故に、相似たるをならべ載し也。其各分ち有事は、意計王、弘計王は御兄弟にして、同じ御殿におはしませしに、「意」と「弘」の音均しくはいかに惑はしからんに、かく申奉りしは、紛れなく分れしもの也。「意」は平声、「弘」は去声にて、即御兄を「大」、御弟を「小」と申、分奉れるもの也。

又、漢字の始て此国に渡り来りてより、六十一代承平の御時迄六百七十年ばかりの間は、世の中の事はいさゝか移りかはる事有ども、猶上代を伝へて、同じ音、同じかな也しかば、言の意もかはらずひとしかりしに、後世には漢字の意によりてかなを心得る故、みだりに成来りし也。

詞はいかに転じたりとも、猶かなの本に依て明らめば、古言の妙なる味ひをしるべし。

とかく吾国の書をよむには、言葉を君とし、漢字は奴僕として見るべし。又、異国の文を見るには、字を主とし、和訓を臣として見る事、学者の心付べき事也。

又、詞も国所によりて平声、去声などのかはり有共、字に書時はかはる事なし。たとへば、『万葉』にのせし東歌は、皆東音にてよみ出せしを、其書るかなは、京歌に書にたがふ事なし。漢字に書る書も、一字の音、連声にては異なれど、字はかへざるが如し。

和語をから国の字に通じ書るもの、『和名抄』の頃迄はかんなも正しかりけるを、夫より後に書る歌書などは、かんなを書たがへ誤りて、猥りに成り来りしに、古き書共を見て正す人もなかりしに、此頃、伊勢の本居翁、『字音かなづかひ』といへる書を顕はし、かんなを正されしは、当時に益あるもの也。

又、唐国の書を和語を以よむに、古へは書の側に星を点じ、「てにをは」の相印とせしに、今は文字の旁に片カナを附して読事となりぬ。されども、和語は「てにをは」を以て詞をなすものなれば、皆和歌の「てにをは」を用る也。歌学なき人の儒書をよむには、「てにをは」たがひの有て、文の義を誤る事多し。

故に、和学に志有ん人は、古を考て、和語の転じ来れると、和語を唐国の字の意もてあやまれるを心付べき事也。

一　和国は歌をよみ、唐くには詩を作りて、各其情をのぶる也。先、和歌の大略を挙ていはゞ、凡そ人としては、見る物、聞事に触れて、心の内にひゞきて感慨する事あるもの也。其心の動き感ずるに付て、楽しみ悲しみの情を詞に発す。されども、詞に出してはいひ尽されぬ心の底の情をば歌にうたひて、其情を顕はすに、喜怒哀楽にしたがひて、自然と節調子備はりて、其楽しみ哀しみの声を出す。是、歌を詠ずるのやむ事を得ざる所也。

又、人のみならず、春の鶯囀花中、秋の蟬吟樹上、こと〴〵く歌にして、己れ〳〵が分に応じて、其折ふしの節物に感じて、生とし生る物おの〳〵其声を出す也。又、歌を詠ずるに、非情の草木、或は風雲雪花の心なきに、心有るごとくよめる。皆是、ふと心にうかむ情にしたがひて、其意を付るは、歌の口伝とする情の実成るべし。

大凡そ感慨の情、内に動ひて、其音声、外に発するの詞を、詩といひ歌といふは、和漢、其おもむき一つ也といふべし。其よつて起る吾国の古へを考れば、諾冉の二尊、天浮橋の上に、西東より向ひ立せ給ひて、始て「あな、にゑや」の御詞をかはさせ給へるこそ、我国恋歌のはじめ、陰陽夫婦和合の根元として、後世、六々の歌仙を称する源成るべし。『毛詩』三百篇も関雎を始とするの意に符合せり。

其後に、伊弉諾尊、西の海檍が原にまして、みそぎし給ふの時、言上し給ふ。是、後世混本歌の始にして、此時に海中より住の江の御神出現ましませしにより、和歌の神とは祝ひ奉る也。

又、三十一もじの歌は、素盞烏尊、出雲八重垣の神詠より始りて、四妙を含蔵し、あまねく人世に伝はれり。夫よりして後、代々の皇神達、皆御歌よみし給へるに、長短の句数定まらず、其御意の尽るまゝにして、長くも短くもよみ給ひしもの也。『日本紀』『古事記』『万葉』等に見えし御歌共、是也。

歌とは、うつたへ也。うたふ也。思ひ〳〵に其意をうたへるもの也。

古しへは、いかなる節調子にてうたひしにや。其ふしはかせ、今の世には伝はらず。長歌、短歌といふも、うたへるふしの長きと短きにていへる也。句の数には拘らぬ事也。

『万葉』は草書をもて記し、『古今集』の頃よりは専ら平がなのいろはもじ世に行はれし故、かな書に記せしを、後世写したがへて、かなを誤りし事共おほく見えたり。

大内にて用ひ給へるを大歌といふ。「大歌所の歌」と有、是也。地下にて用ふるを小歌といふ。今にも民間の人のうたへるを小歌といふなり。東歌はあづま声にてうたひ、近江ぶり、水茎ぶりの類は、其国々の声にてうたへるが、今其ふしは伝はらず、詞のみ残れる也。神楽歌、催馬楽の類、各其ふし有。中昔は今やう、朗詠とて、うたひもの有しと也。鎌倉右大将家の頃は、白拍子のうたへるも、其時々の心をとり合せ作りてうたへる也。静御前の、鶴が岡八幡の神前にて、義経の行衛をしたひてうたへるなど、思ひ合すべし。今、西国卅三所の観音詣するもの、御詠歌のふしは、古への朗詠のふしの残れるとかやいひ伝ふ。

扨又、後世、題詠と云事始りてより、和歌も一変せり。題詠は、詩の詠物の体と同じく、其題に対しては、其人の実情にあらぬ事をもふけこしらへて、巧拙を争ふのはしと成りぬるは、たとへば、其実は落て花のみ残れりともいひつべし。

惣じて、世の衰へ行に従ひ、歌もおとろへ、風俗あしく成来りけんを、西行法師がよみ直し、又其後に頓阿法師などの正風体によみ直せしと也。又、俊成卿の師とせし基俊などより、さま〴〵の異説起り、よみ方の事共も六か敷成来りしもの也。定家卿に至り、此道さかんなるに似て、実は弥古へに遠く、古風一変して、歌の善悪をのみ論ずる事専になりしは、たとへば、正花を似せて金玉をちりばめて、正花よりもうつくしくこしらへたる作り花の、実の正花より一きわ美麗なるやうに、当世の歌の姿の成りしこそ、後世流の和歌の祖成べし。

さて、当時は専ら三十一もじの歌のみさかんに行はるゝにしたがひ、伝書などには、五七五七々の五句を五行、五方、五仏などに配し、或は首、肩、胸、腰、尾など、人の体に表して、古になき、さま〴〵むつかしき伝授事に成来りしもの也。其うへ、歌の病と云事共も始り、和歌の三式など備れり。『浜成式』は光仁の詔勅に応じ、『孫姫式』は聖廟の御製作とかやいへど、四病、七病、八病などいふ沙汰に及んでは、是を以古歌を評せば、古人の名歌、皆病を遁るゝは有まじ。

勅撰は『万葉』に始り、歌合は寛平の頃より盛んにして、道の好悪を定め、歌の勝劣を弁ふれど、是に附て後世は二条家、冷泉家の両流有。さま〴〵の式法のみ多く成りて、古への歌の意にはたがひ、月花によせて詞を飾り、当座の勝負を争ふ戯れ迄なれば、無益の慰み事成べし。

又、詩になずらへて、『古今集』の序には、歌の六義をさたし侍るは、此国にては益もなきさた也。彼国の六義の意には相当らぬも有れば也。

又、古人の歌をよむは、心の祓ともいへり。天地の間に雲霧の八重ふさがれるを、科戸の風の吹払ふがごとく、人の胸の中に、妄念雑慮のこりふさがりてむすぼふれるを、歌に発してうたひはなせば、其妄像の雲はれて、心の内すが〴〵しかるべければ、心のちりを払ふ玉ばゝきともいふべし。

又、古代の歌は、心に感じ、詞にもいひ尽されぬ情を、有のまゝにのべてうたへるものなれば、聞人も一唱三嘆にたえず、涙をながすばかりにおぼえて、さこそとおしはからるゝもの也。人を感ぜしむるのみにも

あらず、天地鬼神も感応有しとかや。是、其人の誠より出るが故也。

後世の歌は、人の心の誠すくなきまゝに、面をかざり、心と詞とのたがへるより、まことしやかによみ出しても、真実の情より出ざる詞故に、皆上手にこしらへたる細工歌とのみ聞ゆる也。まして人を感ぜしめ、涙落さしむるのまこと、いかでか有んや。聖代の古へは、歌をよましめて、人の賢愚をかゞみ、世の興廃を正すと也。

歌の道も、定家卿の頃より一変して衰へたるといふ証有。其故は、定家卿、後鳥羽院の勅答に「遍昭が歌のまことすくなきをこそ歌とは申候へ」と有しにて推て知べし。古へ、小町、能因の歌にて日照りに雨をふらせ、安陪貞任馬上の賡歌、源大将軍の矢先をのがる。又、宗任が梅の歌、東夷の歌也といへども、名将勇士も心を和げしためし、今も人口に残れるをや。

当時にても歌の上手は多けれども、人を感ぜしむるほどの歌はまれ也。余りに面白くたくみて、心にもあらぬ事どもを、珍らかにつらねたるばかりにて、人の聞を宜しくこしらへたるもの也。今の世にも、かた山里のしづのめなどの、歌よむすべは心得ずして、吾心にあるまゝにかざりもなく、ふとよみ出せし歌には、さこそと聞人の心を動かす歌有。是ぞ真実の歌なるべし。

又、恋歌は、二尊浮橋の御詞を始として、人の実情より出る詞也。妹背の道は人倫の第一にて、物の哀れを知るも、誠の道に入るも是より始るにより、昔よりの撰集等にも、恋歌を多くゑらばれたり。是も今の題詠に成りては、心にもあらぬ恋歌のみ多くよみ出す事となれるは、道の衰へたるにあらずや。

又、中頃より、和歌に秘事口伝といふ事起れり。先、二条家の伝と云は、頓阿法師五世の嫡流、東下野守平常縁、其先祖重胤の時より、婚家のよしみにより二条家の秘要を伝へて、是を種玉庵宗祇に伝ふ。宗祇より近衛尚通公、三条西殿、逍遥院、称名院、三光院、細川幽斎、八条智仁親王、後水尾院と、段々御相承有。又、宗祇より牡丹花肖柏に伝ふるを堺伝授といふ也。

今、二条、冷泉の両流有事は、定家卿の御館は寺町二条通也、御子為家卿の長男為氏卿は二条通に住給ひ、次男為助卿は冷泉通りに住居有が故に、二条、冷泉と称する也。歌道も両流とわかれぬれど、二条家は足利家の乱に家亡びしとかや。今は只、冷泉の御家のみ残れり。質より文に趣くは、世の中の常とはいひながら、歌書、よみくせの清濁、短冊懐紙の寸法、書法迄、両家の伝、格別にちがへり。まして、古今の箱伝授、三鳥三木一草一虫の伝、或は『伊勢物語』の七箇伝、『源氏物語』の三箇伝、十五箇の口決、百人一首の秘歌、師伝、師説、『徒然草』の三箇伝、『東鑑』の三伝なんど称して、諸家の説区にして決定し難きは、是、偏に古へをしらぬ中古の文盲より出たる拵へ事也。

其伝授と云は、仏法を附会し、神道を盗み、両部習合の説を専にして、有職家の説などを交へたるものにて、曾て古へにはなき事共也。歌道を高上にせんとして、却て歌道の本意を失へるもの也。

され共、歌の「てにをは」に於ては、諸家ともにたがふ事なし。歌のみならず、かなぶみに書る草紙類に至るまで、「てにをは」たがひては語をなさゞるが故也。儒仏の書にても、和語を以よむには、皆是、和歌の「てにをは」也。

又後世、和歌の抄物など、其詞を解に、多くはをしはかりの説のみにて、誤れる多し。近代、『八重垣』『呉竹集』『正木のかづら』の類、詞を

解たる書多しといへ共、古へにくらくして、和語の根元をたゞさぬ後世家の見斗りにて、附会不学の誤に出たり。歌学者流、多くは文盲の人なるが故也。

又、近世に名歌也と称する秀逸の歌詞を、「ぬしある詞」とも、或は「制の詞」なんどいひて、よまぬ詞とし、或は「古点の詞」など称するは、初心の人を戒めて、金玉の詞をあしくつゞけなしては、名歌の専なかるべしとの制なるべけれど、皆後世の僻み心にて、元来、歌は人情の実を尽す吾国皇神の道にて、御世をしろし召けん始めより、天下を治め政を助る道たる事を忘れて、ちいさき慮りより出たるもの也。

前にも論ぜし如く、我東邦は陽気発生の国にして、古へより武威を表にして治め来れる国なれ共、裏に慈愛の徳を含んで、天下の人民を一和せしむるには和歌の道有て、人の心を和らげ楽ましむ。是則、玉矛の大道にして、陰陽剛柔の徳備はりて、天が下平らげく、安らげく、「豊蘆原の水火の国」といへる名にもかなひつべし。後西院の御製にも、「蘆原の中つ国の名国の風此道ならで何かあをがん」、又、歌を「敷島の道」といへる主意にもたがはざるべし。『古今』の序にも、貫之の「武きもの、ふの心をなぐさむるは歌也」とかけるも、げにさる事ぞかし。

古へは世の中事少なく、浦安国の名におひて、人の心もなほかりしまゝに、よみ出す言の葉も大らかに、みやびやかに、心のまこと顕れて、聞人も感を催す事多かりき。後の世に異国の道も伝はり来りしまゝに、外国の詞さへ交はり、或は文字の音を用ひ、いつとなく事しげく、人の心もさはがしく、偽り多く成り行まゝに、よみ出す言の葉も、事繁く表をかざり、誠すくなく、偽れる心をもて、むつかしく巧みてこしらへたるのみならず、雅語をゑらみて、いやしき詞をさけ、うつくしくけ高きを宜しき歌とのみ心得る風俗と成来りしは、此道の衰へたるならずや。

かく変じ来れるも、時勢の然らしむるといふべきにや。惣じて、源平の乱れより天下戦国となりて、武士と称せらるゝほどの者は、皆山野を家とし、弓箭兵杖、其身をはなたず、甲冑を枕とし、昼夜生死のちまたに遊んで、片時も安堵の思ひをなさゞりしかば、和歌に心をよする者まれにして、此道は皆、堂上に帰して、五百年の久しきを経て、漸く昇平の御代と改りぬれど、今の世の歌は、月雪花の興をそふるばかりのもて遊びものと成り、歌よむ事は貴人高位の上にのみ有事のやうに覚えたる戦国の余習にて、武家たる人の和歌などを詠ずるは、公家方のまねをする歟なんどそしる族も有は、日本に生れながら、吾国の道を知らざる痴人成るべし。古へより名将勇士、各歌を詠ぜしためし、『武家百人一首』にいちじるし。

又、乱世にも風雅にのみ流れて武義を怠りし北条氏康、大内義隆の類は、和歌蹴鞠の遊興にふけり、弓矢を忘れて、遂に家を亡せしは、和歌の本意を失ひ、徒らに歌舞遊宴の媒とせし誤り也。

又、後世、連歌誹諧といへる事の流布するは、古への和歌の支流也。其内、連歌は日本武尊の「新ばりつくば」の詞におこれるものにて、賦物の習ひなどいふ事有。古代は連歌の神に日本武尊を崇む。故有て、応安の頃より天満宮を崇むる也。連歌宗匠の始は、応安の頃、二条太政大臣良基公の免許を受て、侍公に始るとかや。数人句をつぎ、百韻に満て篇をなす。長歌に似たり。

誹諧は又、連歌をする人々の、古への誹諧歌の体になぞらへて、おかしき俗言などにて句をつらね、座興とせしより事起りぬ。誹諧宗匠の始は、慶長年中、近衛竜山公の免許を受て、松永貞徳に始ると也。其後、

芭蕉翁に至り、一家をなしてより、十哲など称する門弟有て、各門風を立しより盛んに世に玩ぶ事とは成りぬ。

俗談平話を以、然も風雅の味ひをこめ、虚実の論には老荘家の骨髄を含み、貴賤老若の人情を尽し、上朝庭より大名高家のふるまひ、賤山がつの手わざまでいひ尽さずといふ事もなく、月の夜、雪の朝、或は花の夕ばへ、雨夜のつれ〴〵に至るまで、折にふれ物に感じていひ出るに安く、神祇、釈教、恋、無常、有りとあらゆる世の中の有さまを写して、今の世のうづ高き歌詞にてはいひ難きふしも、誹諧にては尽さずと云事なきは、『万葉』の古へにかへりて古風の夷曲は、誹諧に残れるにやと思はる。歌道の『正法眼蔵』とこそ称すべき。

されども、古へにくらく、歌学もなくして、只当世の口真似をする誹人ならば、諺にいふ、鵜のまねをする烏成べし。

又近世、延宝の頃より、前句附といふ事流行して、褒美景物のさたに及ぶ。是、民間のもて遊びぐさ也。唐土にも、是に類せる事有。元の世に有し事也。元人呉渭、月泉吟社を結び、「田園雑興」と云題を出し、天下にふれて詩を集るに、二千七百余首を得、其内六十首を板行して、一番より段々景物を出し、詩賞とすと也。

かく世の中事繁く、人の心も思ひ〳〵に花にのみ成り行て、実すくなく成にしを、古へを考へて、そのもとつ心を得て、敷島のむかしの風ふたゝび世に吹伝へてしがなと、ほりするものかも。

次に、からうたの大略を論ぜば、かの孔子、聖りの三千余篇を削りて三百十一篇と定め、末の世に教戒をたれ給ひしと云説によつて思へば、国風雅頌の体にしたがひて、六義の説、諸注異同有。其あらましをいはゞ、六義は詩の体に非ず。鄭玄、三経三緯の説を立しより、六義遂に詩の体と成て、六義亡びぬ。『詩』の大序に、風、賦、比、興、雅、頌とついでたるにて知べし。風賦是一類、比興又一類にして、雅頌も又一類也。二義相比して六義全しと云べし。

風は、専ら民間に流行して、田俊紅女の作に出。後世、里巷の歌謡、竹枝の曲の類にて、日本の夷曲、催馬楽にひとしく、諸国の曲調同じからず、国々の盛衰政事の得失にも預れば、古へ、天子巡狩の序に、太史の官をして、其国所の歌謡をとりて記さしめ、勧善懲悪の政を施し給ふは、詩に人情の実を尽せるが故也。

賦は、すぐさま其事を賦して、贈答をなしたるもの也。『左伝』などに、士大夫、各詩をうたひて贈答するに、「某詩の何章を賦す」などいへる、是也。今の世に、酒宴なかばに小歌をうたひ、興をそゆるが如し。

比といふは、其詞を誦して、其意を物になずらへ、世をほめ、或は時を譏れり。興は、其詞に感じて、吾心の思ひを起すもの也。『論語』に「可二以興一」といへる、是也。雅は、是を朝庭に用ひて、声の雅正にとれり。頌は、是を宗廟に用ひて、祖宗の徳を褒頌せるものにて、詩に定て六つの体有に非ず。

『孟子』『左伝』などに引処の詩、多くは比興の義也。此故に、六義、皆三百篇に通じて、一詩各六義有といふべし。「滄浪の水」はもと水の清濁を詠ぜり。是をうたふは、則ち賦也。民間の孺子、是をうたへるは、是風也。漁父の世と押移るに取しは、比也。孔子の是を聞て自取の道に感ぜしは、興也。もし是を朝庭郊廟に用ふる時は、雅頌といひつべし。是、一つに六義有るならずや。

三百篇の内、二南、雅頌の如きは、楽歌に用ふべし。其他は、楽歌には用べからざる也。孔子の「放二鄭声一」といひ、「悪三鄭声之乱二雅

楽」と云へるは、其淫声をしりぞけ、戒たる也。面白くして妙を極め、雅音を変乱する事、紫の朱を奪ふが如きを以て也。

右のごとく、古の詩は、雅頌をはじめ、十五国風、皆其国々の声有てうたひけらしを、春秋戦国を経て、西漢の時に至りては、詩をうたふ事を伝へ失ひて、其詞のみ残れり。今の『詩経』、是也。

其後、漢魏六朝に及んで、詩体漸々に変じ、唐に至て、声律大に備はれり。是、斉梁の頃より、韻学盛んに行はるゝの故也。又、唐朝は詩を以人才をゑらべるが故に、人々詩に力を用ひしとも見えたり。趙宋、胡元の詩、唐に不及して、明に至り、又一新して詩を以称せらるゝ諸名家多し。今、清朝の詩は、唐明の詩体と又異也。如是、古今に詩も変じ、風調の雅俗、体裁の好悪は、『滄浪詩話』『詩藪』を始とし、諸名家の詩話に詳なれば、逐一爰に贅するに遑あらず。

古詩は、蕭明太子の『文選』をはじめ、近体は、唐明諸名家の集を閲して、各其長ずる処を知べし。詩も時代と共に変ずるは、彼国は人の国を亡して、其天下を奪へるの後、章服制度を改め、生民の耳目を新たにするより、人の風俗も心も改まるに従ひ、作り出す詩も前代の作とは格調も改ると見えたり。

「古の詩は、人情の実を先として詠じ出せる故に、詞も古雅に、天地鬼神も感ぜしむ」と子夏が大序に見えたれ共、後世は浮靡華麗に流れて、金玉の詞をつらね、意を巧にし、人の聞を驚かす事のみを勤として、人の感慨を催すの作は稀也。是、日本の和歌の変と同じく、実を失ひて花にのみ流れたるもの也。和漢ともに、詩歌にも古今の変有事を思ふべし。

一　唐土を中国、中華と称し、日本を東夷といふ事、『後漢書』已来、歴代の史に見えたり。吾朝にても、儒書盛んに行るゝに従ひ、彼国の書をよむもの、自然と漢人の心になり、彼国にひいき付て、中華は聖人の国、吾国は夷狄の部にて、辺鄙の小国に生れたりと悔みなげいて、彼土をうらやむ族おほき事也。彼国人の詞に、「日本人ほど、我ながら吾国をいやしんずる者はなし」といへるこそ理りなる事也。

此僻失は、久しく儒書をのみ見たる人の、彼国の聖人達を信向の余り、天地の間には唐土より貴き国はなく、聖人の道より尊き教はなしと思ひ込所より出て、実は天地世界の実理を見誤り、聞見のせばきにより、己れが本心を書より移されたるもの也。此失、常の人にはなくして、儒学者の上に必有病也。

儒書は皆、唐土の人の記せるものなれば、己が国を尊び崇めて、四方の国々を皆夷狄と賤しめたるは、尤さも有べき事也。他国にて其書をよむ人の、己は外国の夷に生れたりと、かたわ者の如く思ひ、禽獣の如く思ひなして、吾国にさま〴〵の疵を付てなげく輩は、あさましき事ならずや。元来、天地の大なる、万国輿地の広大なるを不知が故也。

夫れ天は地の外を包み、地は往くとして天をいたゞかざる処なし。然れば、各其土地の限る処、其地なり〳〵に天を戴て、各一分の天下也。唐土より見れば、唐土は天地中和の国にて、聖人出生し、礼義道徳盛んなれば、四方の国々の、言語も不通、異形異風の体を見ては、己が国を中国とし、外の国は皆蛮夷と賤しめしもの也。日本人の心にていはゞ、日本は天地中和の国にて、開闢已来神胤続き、万世君臣の大綱不レ変事、外国の不レ及処、殊に武毅正直の風、天性に根ざせるを思へば、日本を中国とし、唐、天竺は戎狄成べし。

先づ、日本を中国といふの証、無きにしもあらず。神代より「豊蘆原

の中津国」といへり。天地と共に気化し給ふ天御中主尊、是、中つ国の御中の主也。又、神武天皇御即位の始に中臣祓を奏する、皆是、古へより中を尊ぶ自然の国風也。後西院の御歌にも、「蘆原の中つ国の名国の風」と遊ばし給へり。又、西国へ下る道筋を中国路といふ詞有も、古へ「中つ国」といへる語の残れる也。旁を以思へば、日本を中国と称せんも、又宜ならずや。

或人の説に、「日本の小国、いかでか唐土の大国に対する事を得ん」といへど、是又、例の偏見より出る説也。たとへば、せいの高き親は親にて、小男の親は賤しいとすべきや。大小を以論ずる事、全く利害の情より出る故也。況や世界万国の広大なるを以思へば、唐土を三つ四つも合せたらんやうの国いくつも有。各それ〴〵に其国を司り治る主有て、其法、其学問も有と見えたり。其国の人は、己れが国を中国とし、唐、日本などを夷狄とこそ見るらめ。

又或説に、「周公、土圭の法有て、日月の景をはかれば、嵩山、土地の中に当り、日月の景全し。天地自然の中国也」と。是、唐土一ぱいの真中に当る嵩山の地を中と定めたるものにして、天地の中に非ず。甚だ小見也。

日景を以中国を定めば、亜細亜州の一世界にては、沙馬太剌国を中とすべし。此国は南北三千余里、東西七、八百里にして、国の正中、赤道の下に当るが故に、春秋二分に日輪頂上に有、日中景なし。春分の後は、其影、南に有。秋分の後は、其影、北に有。甚熱国にて、人皆裸体、色黒し。鶴、羊の類も皆黒色の由。硫黄、岩穴より出、山、草木を生ぜず、黄金を生ず。米は一年再び熟し、麦無く、四時桙類あり。東瓜久して損ぜず、西瓜大さ二、三尺也とかや。

日景の中を以、天地の中国を定めんには、此スマアダラ国をこそ中国とは称すべき也。然るに、赤道より、北十五度より四十度余りの国より日景をはかりて、己れ天地の中国也と思へるは、浅はかなる説共也。日本、元より天地の中国に非ず。然れ共、唐国の書をよむ人の、中華、中国と彼国を称すれ共、吾国も中つ国と称する事、無きにしも有ざるものをと、しばらく偏固の儒生に対して弁ずるのみ。

又、備前の大儒熊沢氏の顕はせる書に、「唐国は世界万国の師国也」といへるは、聖人を尊信の余りに発せる偏見の説也。又、近代、大儒先生と称する荻生氏の、孔子の像を賛して、「夷人物茂卿」と書したる由。「吾身は東夷の人也」と、孔子に対しては謙遜の辞にても有るべけれども、日本に生れ、日本の衣食に身を養ひながら、儒を尊信の余り、父母の国を賤しめたるは、日本の天子、将軍に対し奉り甚しき不敬にて、儒書に精神を奪はれ、吾本心を移されたるあやまち也。

海内の名儒と称せらるゝ先生にも如是の通病有ば、まして初学の儒生などは慎しむべき事ならずや。其先祖と称する物部大連の詞に、「孔丘孟軻食レ狗夷賊、吾操レ戈逐レ之」云云。如是いへる祖先の言と相矛盾するの甚きは、いかにぞや。

又、徂徠の、肥後の藪震庵に与ふる書簡の内に、「洗二侏儒鴃舌之習一、而彷二彿乎華人之言一、海内唯伊原蔵二三輩已」と書せるは、吾国の詞を侏儒鴃舌の蛮夷とし賤めて、ひたすら彼土をのみ尊びしたへるもの也。吾国は元来、言語を貴ぶの国にして、唐土は文字を貴び、声音を重んずる国也と云事を考へざるもの也。吾国の人も、彼土の人の華音を聞ては、一向に何事をいふと云事もわからねば、則侏儒鴃舌也。世界万国、各風土の異なるに従ひ、言語声音同じからねば、己れ〴〵が国々より外

国の言語を聞ては、皆各侏儒鴃舌成べし。

惣じて文学の道に疎く、和漢古今に通ぜずして、一流の偏見にかたまり、或は無学にて、自己の利発のみにては、事に応じてなすわざもいふ事も、無知の小児に遠からざる事をまぬかれ難し。然れば、人としては学問を勤めて、各才智をみがくべき事也。

されば共、儒者は聖賢をひいきし、仏者は釈迦をひいきし、神道者は神をひいきし、皆己が帰依したる一偏の小見に落るが故に、ひが事もいひ出ると見えたれば、学者は専ら三教の異同を考へ、儒仏の道にても、日本に益有を取用ひ、益なきを捨なば、大なるあやまちなかるべし。

和学知辺草　巻之上　畢